

籬。六口口別十預前造備送宮内省、

年料竹器

薰籠。大一口口徑二尺二寸、高二尺七寸、料篔竹五十株、中一口口徑一尺、高二尺、料篔竹卅株、中茶籠廿枚、方二料篔竹各六株、

凡年料雜籠料竹四百八十株、用司國園竹、

〔饅頭屋本節用集財寶鬚籠

〔源氏物語初音〕北のおとゞより、わざとがましくまあつめたるひげこども、ひわりごなど奉れ給へり、えならぬ五えうの枝に、うつれる鶯も、思ふこゝろあらんかし、

〔源氏物語浮舟〕正月の一日すぎたる比わたり給て、わか君のとしまさり給へるをもてあそびうつくしみ給ふひるつかた、ちいさきわらは、みどりのうすやうなるつゝ、み文のおほきやかなるに、ちいさきひげこを小松につけたる、又すぐくしきたてぶみとりそへて、あふなくはしり

参る、

〔拾遺和歌集十卷〕亭子院京極のみやす所にわたらせたまうて、ゆみ御覽じて、かけ物いださせ給けるに、ひげこに花をこき入て、さくらをとぐらにして、山すげをうぐひすにむすびそへて、かくかきてくばらせたりける、
一條のきみ

木のまよりちりくる花はあづさ弓えやはとゞめぬ春のかたみに

〔大和物語上〕故源大納言隆宰相におはしける時、京極のみやすところ、藤原享子院の御賀つ

かうまつり給とて、かゝる事をなんせむと思ふさ、げ物一えだ二えだせさせて給へと、聞え給ひければ、ひげこをあまたせさせ給ふて、としこに色々なをそめさせ給ひにけり、まきもの、おりものども色々なをそめ、よりくみなにかとみなあづけてせさせ給ひけり、